



おがさわらじましんけいす  
「小笠原島真景図」



「マラン船」

べざいせん  
「弁才船(模型)」



「大黒屋光太夫と磯吉」

# 漂流者たちと 日本の領土の歴史

2022 3/8 火 — 5/8 日

日本の島々をめぐる  
苦難と発見と交流の物語

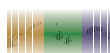
入場  
無料

会場・主催 領土・主権展示館 開館時間 10:00~18:00

休館日 月曜日(月曜日が祝休日となる場合はその次の平日休館)

最寄り駅: 東京メトロ 銀座線「虎ノ門駅」3番出口より徒歩1分 / 東京メトロ 丸の内線・日比谷線・千代田線「霞ヶ関駅」A13出口より徒歩5分 / 東京メトロ 日比谷線「虎ノ門ヒルズ駅」A2出口より徒歩5分

\*開催期間は諸事情により変更する場合があります。最新情報は当館ホームページや公式Twitterでご確認ください。  
\*コロナ感染予防への対策を徹底するため、手指消毒や検温等にご理解とご協力をお願いいたします。



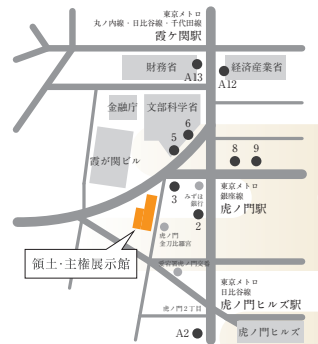
領土・主権展示館  
NATIONAL MUSEUM OF  
TERRITORY AND SOVEREIGNTY

<https://www.cas.go.jp/jp/ryodo/tenjikan>

@ryodoshuken Twitter やってます

\*詳細はホームページを御覧ください。

所在地 東京都千代田区霞が関3-8-1 虎の門三井ビルディング1階



左上:「西 12月19日初見小笠原島國」宮本元道「小笠原島真景圖」(国立国会図書館蔵) / 右上:「嵐丸船の図」(沖縄県立博物館・美術館蔵) / 右中:「大黒屋光太夫と磯吉」桂川雨岡(同蔵) / 吹上:「船模の図」(北海道大学附属図書館蔵) / 左下:「船模の図」(科学館蔵) / 右下:「大黒屋光太夫と磯吉」桂川雨岡(同蔵) / 吹上:「船模の図」(北海道大学附属図書館蔵) / 左中:「船模の図」(科学館蔵)



# 漂流者たちと日本の領土の歴史

2022 3/8(火) - 5/8(日) | 日本の島々をめぐる苦難と発見と交流の物語

前近代、航海技術が未発達だったころ、日本及びその周辺で多くの漂流事件が発生しました。漂流の末に我が国ではあまり知られていなかった島に漂着し、日本人の日本周辺の島々に対する認識が深まったり(「地理的理解の深化」、漂流者が外国に漂着し、救援の手が差し伸べられる中で、国際的な「接触」や「交流」が生まれ、その中で領有権に影響を与える出来事が発生したりすることがありました。

我が国固有の領土である北方四島、竹島及び尖閣諸島についても、その歴史を振り返ると、多くの漂流をめぐるエピソードがあります。また、江戸時代、鳥島や小笠原諸島への日本からの漂流者の漂着が、両島の領有や開拓のきっかけとなっています。

この展示は、漂流事件の紹介を通じて、我が国の領土に関する歴史を振り返ろうとするものです。

## 展示構成

Prologue 江戸時代の国際情勢と漂流

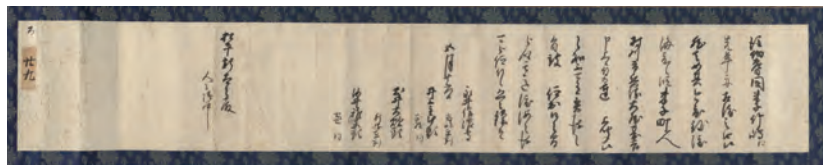
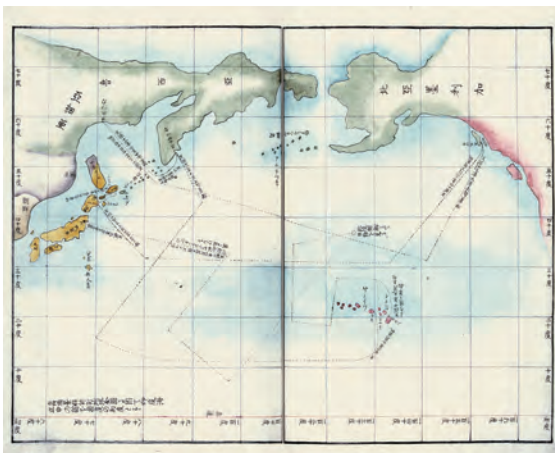
Chapter 3 尖閣諸島

Chapter 1 北方四島

Chapter 4 鳥島・小笠原諸島

Chapter 2 竹島

## 展示資料のご紹介

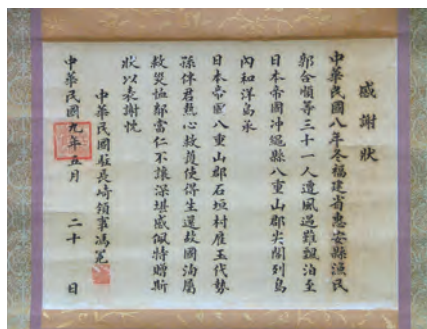
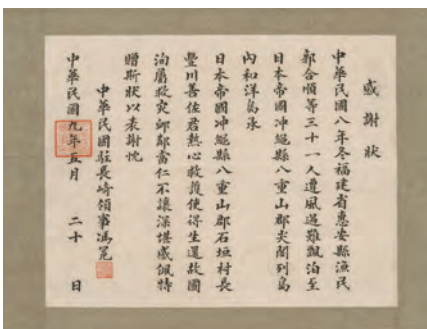


上: 竹島渡海御免の達書(写)(米子市立山陰歴史館所蔵) [複製品展示]

1618年(1625年の説もある)、将軍が大谷、村川両家による鬱陵島(当時の名称は「竹島」)渡海を許可したことを伝える文書の写し。鬱陵島渡海の願い出のきっかけは、大屋(谷)甚吉の鬱陵島漂着でした。

左: 『時規物語一』首巻より漂流図  
(公益財団法人前田育徳会所蔵)  
[複製品展示]

加賀藩主の命により、1838年に漂流した越中(現:富山県)の「長者丸」の乗組員の供述に基づき遠藤高環が編纂。択捉島までが日本本土と同じ色で塗られています。



「母嶋南手之山上喫飯圖」宮本元道「小笠原島真景圖」  
(国立国会図書館所蔵) [パネル・映像展示]

1861年、小笠原島に派遣された幕府調査団に参加した宮本元道によるもの。幕府の小笠原島調査は1675年に引き続き2度目でしたが、最初の調査のきっかけは漂流です。

尖閣列島遭難中華民國感謝状 豊川善佐氏宛(左) 玉代勢孫伴氏宛(右)  
(石垣市立八重山博物館所蔵) [パネル展示] ※常設展スペースにて、複製品展示(左のみ)  
尖閣諸島に漂着した中国の漁民の救助に対し中華民國駐長崎領事官が1920年に日本側に送付した感謝状。  
「日本帝國沖繩縣八重山郡尖閣列島」と記されています。

